論 文 の 内 容 の 要 旨

韓国語と日本語のヴォイスに関する対照研究
ー動作主の格標示と構文の生産性を中心にー

尹　亭 仁

本研究は、文法カテゴリーの中で中核をなしているヴォイス、とりわけ、受身構文と使役構文における動作主の格標示を手がかりとして、韓国語と日本語のヴォイス構文に見られる構造的相違の一面を明らかにしようとしたものである。

受身と使役で代表されるヴォイスは、テンス、アスペクト、モダリティーといった文法カテゴリーの中でもっとも文構造と関係している。そのため、一つの言語の構造を記述または他の言語と対照する上で、ヴォイスは要になる文法要素であると言える。

韓国語のヴォイスは日本語と同様、「ガ（가 ga）格」「ヲ（를 leul）格」「ニ（에 e/에게 ege）格」の移動とヴォイス接辞の付加により述語の形態が変わることで成り立っている。すなわち、構造格の交替によって文構造が操作されるのである。したがって、ヴォイスは両言語の内部構造を知る上で一番手がかりとなるカテゴリーである。

ところが、両言語においてヴォイスの機能を担っている接辞に派生上または格標示との共起上相違があるため、ヴォイスの対応において構文的にも意味的にもずれが生じている。今まで、両言語のヴォイスに関する対照研究、例えば、持ち主の受身、間接受身、漢語動名詞の受身、使役構文における再帰性や結果含意など、両言語のヴォイスが持つ相違点を取り上げた研究は数多くある。しかし、これらの研究が両言語のヴォイスのどのような側面と関わっているのか、

また指摘された現象が両言語のヴォイスにおいてどれほど特徴的あるいは比重を占める現象なのか、その関連性がはっきりしていない。両言語においてヴォイスが文構造と密接に関わっている以上は、構造的枠組みを用いて全体的に捉える必要がある。多角度からの両言語のヴォイスに関する対照研究が相互にどのような関連性を持つものかを明らかにするためにも、この作業は必要であると考える。

本研究では、受身と使役は、(1) と (2) のようにガ (가) 格標示、ヲ (를) 格標示、ニ (에/에게) 格標示を中心に事態を対称的に捉え、言語化していると考えている。すなわち、両方とも格標示による働きかけの方向性や語順に違いはあるにせよ、2 項動詞または 3 項動詞の構造を用いて受身構文と使役構文を派生しているのである。

(1) 両言語の受身構文における名詞句の格標示と文構造

KP. X-가 (Y-에/에게) (Z-를) V (N) -이/히/리/기-다／지다／되다・받다・당하다
-i/hi/li/gi-da／jida／doeda・badda・danghada

JP. X-が (Y-ニ) (Z-ヲ) V (N) - (r) areru

(2) 両言語の使役構文における名詞句の格標示と文構造

KC. X-가 (Y-에/에게) Z-를 V(N) -이/히/리/기/우/구/추-다／게 하다／시키다
-i/hi/li/gi/u/gu/chu-da／ge hada／sikida

JC. X-が (Y-ニ) Z-ヲ V(N)- (s) aseru

(1) と (2) に見られる韓国語と日本語の受身構文 (KP・JP) と使役構文 (KC・JC) をそれぞれ「形態レベル」「統語レベル」「意味・語用レベル」の 3 つのレベルから対称的に捉えた本研究の分析により、以下のような点が明らかになった。

まず、受身を形態レベルから見ると、日本語の受身動詞は＜V (N) - (r) areru＞という一つの形態的まとまりをなしているのに対して、韓国語の受身動詞は I 類の＜V-이 i/히 hi/리 li/기 gi-다 da＞、II 類の＜V-어 eo/아지다 ajida＞、III 類の＜VN-되다 doeda＞＜VN-받다 badda＞＜VN-당하다 danghada＞の 5 つの異なる形態を用いている。I 類の受身動詞の場合、現代韓国語において新たな派生は見られない。現在、その数は 200 語を越えないと思われるが、本研究での調査結果によると、小説、新聞、雑誌などで実際使われているのは 163 語くらいである。この中で 41 ほどの動詞がヲ格標示の名詞句が共起する用法を見せている。II 類の受身動詞の場合、語形成における制約が指摘されたことはほとんどないが、用例の分析か

ら「때리다 ttaelida (殴る)」「꾸짖다 kkujijda (叱る)」など意志動詞との結合に制約が見られた。Ⅲ類の＜VN-되다＞の場合も状態変化の意味を帯びにくいVNとの結合に制約が見られた。

受身を統語レベルから見ると、韓国語の5種類の受身接辞はそれぞれ派生上に制約があるにもかかわらず、日本語の受身構文における動作主の格標示ニ格・デ格・カラ格と共起関係が平行している。しかしながら、受身接辞とニ格標示、受身接辞と＜에/에게＞の共起力の違いが両言語の受身構文の生産性、すなわち非対応の様相を呈している。特に、Ⅱ類の受身接辞＜-지다＞の場合、実例を用いて受身接辞と動作主標示との共起関係を考察した結果、また日本語の受身構文との用例の対照を試みた結果、多くの先行研究で取り上げられているほど韓国語の固有語の受身化を行っていない。ヲ格標示はもちろんニ格標示との共起制約を受けているのである。Ⅰ類の受身動詞に派生できない固有語動詞はⅡ類の受身動詞に派生できる、Ⅱ類の受身接辞は述語との結合に制約がない、などの従来の捉え方は見直されなければならない。受身は構造格を用いて構文を生産している統語的仕組みであるため、受身接辞と構造格との共起制約は受身構文の生産性の制約に繋がるからである。

「間接受身」(「被害の受身」、「はた迷惑の受身」)、「相手の受身」、「使役受身」などが日本語の受身の特徴として取り上げられるのは受身接辞とニ格標示との共起力によるものである。日本語の受身構文におけるこのようなニ格標示の共起力に対して、韓国語の受身構文の制約、特に5種類の受身接辞を用いても日本語に対応できないのは受身接辞と＜에/에게＞標示との共起制約による部分が大きい。

受身の意味・語用レベルからは、両言語の対訳小説での受身構文の対応関係を分析した結果、受身構文の機能上の相違が見られた。日本語の受身構文はニ格標示との共起力に支えられ主に有情物主語が被る「受影」という機能に重心が置かれているとすれば、＜에/에게＞標示との共起力が弱い、つまり制約を受けている韓国語の受身構文は非情物主語が被る「状態変化」または「結果状態」に重心が置かれている。

さらに、受身構文での考察結果を踏まえながら対称的に使役を形態レベルから見ると、日本語の使役動詞が＜V-(s) aseru＞という一つの形態的まとまりをなしているのに対して、韓国語はⅠ類の＜V-이/히/리/기/우/구/추-다＞、Ⅱ類の＜V-게 하다＞、Ⅲ類の＜VN-시키다＞という3種類の異なる形態を用いている。Ⅰ類の使役動詞の場合、現代韓国語において新たな派生は見られない。本研究での調査結果によると、現在、小説、新聞、雑誌などで実際使われているのは115語くらいである。この中で半数近くのⅠ類の使役動詞が再帰動詞としての用法を見せている。Ⅱ類の使役動詞の場合、その派生が生産的と捉えられてきたが、用例の分析から意

志動詞との結合に制約が見られた。Ⅲ類の使役動詞の場合、意図性の高い他動詞 VN はもちろん自動詞 VN とも結合に制約が見られた。

使役を統語レベルから見ると、韓国語の 3 種類の使役接辞はそれぞれ派生上に制約があるにもかかわらず、日本語の動作主標示ヲ格、ニ格、ヲシテ格と共起関係が概ね平行している。しかしながら、使役接辞とニ格標示、使役接辞と＜에/에게＞標示との共起力の違いが両言語の使役構文の生産性の違い、すなわち多くの非対応の様相を呈している。日本語における「V-テアゲル構文」「V-テクレル構文」「V-テモラウ構文」などが使役構文と関わりが持てるのはいずれの構文もニ格標示との共起力を持っているからである。日本語の使役構文におけるこのようなニ格標示の共起力に対して、韓国語のⅠ類の使役構文においての多様な再帰用法、すなわち、動作主標示が＜를（ヲ）＞標示に留まっていること、Ⅱ類の使役構文において意志動詞の用法があまり見られないこと、日本語の外部格動作主標示ヲシテ格より外部格の＜으로 하여금 eulo hayeogeum＞が多様な条件で他動詞派生使役構文に用いられていることなどには使役接辞と＜에/에게＞標示との共起制約が関係している。Ⅲ類の使役構文において意図性の高い自動詞 VN および他動詞 VN と＜-시키다 sikida＞が結合できないのもこの＜에/에게＞標示の制約で説明できる。

使役の意味・語用レベルからは、受身構文と同様、両言語の対訳小説での使役構文の対応関係を考察した結果、ニ格標示が安定している日本語、＜에/에게＞標示に制約がある韓国語においてそれぞれの使役構文の機能に相違が見られた。韓国語の使役構文は意図性動作主への働きかけより非意図性動作主への働きかけが多く、この場合日本語は他動詞構文が対応する。韓国語の使役動詞は日本語の他動詞が担っている対象の状態変化を表わす用法も持っているのである。両言語のヴォイス構文に見られる相違は概ねヴォイス接辞と動作主標示のニ格および＜에/에게＞の共起関係の相違に還元できる。

以上のように、本研究では動作主標示を手がかりとした統語的枠組みを通して、韓国語の 5 種類の受身構文および 3 種類の使役構文の全体の様子、統語的特徴および構文それぞれの制約の様相などを提示することができた。韓国語におけるこのようなヴォイス構文の生産性の提示は類似した統語構造を持つ日本語との対照研究によって得られたものである。